顕　彰　状

高井有一（たかいゆういち）氏（本名田口哲郎）は、１９３２年４月２７日に東京府北豊島郡長崎町に生れた。父田口省吾は画家、祖父の田口掬汀（きくてい）は明治文壇で活躍した小説家である。小学生時代に祖父と父を失い、疎開先の秋田県角館（かくのだて）では母も失った。こうした戦時中の体験は、氏の文学の原点として、その後繰り返し反芻されることとなる。新制の成蹊高等学校で中村草田男の授業を受け、成蹊大学に進むが、１９５２年早稲田大学第二文学部外国文学（英文学）専修に編入学、文学サークル「現代文学会」で活動、かたわら大学の広報誌「早稲田学報」の編集助手を務めた。その頃の学友には、生島治郎、青木雨彦、長部日出雄らがいた。

氏は１９５５年に早稲田大学を卒業後、共同通信社に入社、文化部に配属され、芸能担当、さらには文芸担当として２０年の長きにわたって活躍するが、そのかたわら小説を書き続けた。立原正秋、岡松和夫、加賀乙彦、辻邦生ら実力ある若手のグループの雑誌「犀」に同人として参加、「夏の日の影」「北の河」を発表する。そのうちの「北の河」が「文学界」の「同人雑誌推薦作」として転載され、それが１９６６年１月に芥川賞となり文壇にデビューした。抑制された端正な文体の中に、戦中の母の死を鮮烈に造型した文学世界は、多くの人に強い印象を与えた。

１９６６年に第一創作集『北の河』を刊行してから、静かな口調で戦争に関わるモチーフを追求し続け、「少年たちの戦場」（１９６７年）「夜明けの土地」（１９６８年）をはじめとする多くの作品を発表した。その間、１９６９年の第七次「早稲田文学」復刊に際しては、立原正秋、秋山駿らとともに編集委員として支え、多大な貢献をした。１９７５年に共同通信社を退社後、文筆に専念、１９７６年には祖父田口掬汀（きくてい）らの明治青年群像を描く「夢の碑（いしぶみ）」を発表、芸術選奨文部大臣賞を受けた。その後も、氏ならではの観察眼に根差した文学世界は深まり、短篇作家としての力量を発揮した連作短篇集『夜の蟻（あり）』（１９８９年）や、友人立原正秋の人間を描く「立原正秋」（１９９１年）、さらには「昭和」という時代を愛惜とともに描く長篇「時の潮」（２００１～２００２年）などの名作を発表し続けている。

氏は、芥川賞・芸術選奨文部大臣賞に続き、１９８４年に谷崎潤一郎賞、１９９０年に読売文学賞、１９９２年に毎日芸術賞、１９９９年に大仏次郎賞、２００２年に野間文芸賞など多くの賞を受けた。２０００年から２年間、日本文芸家協会理事長の要職をも務め、文壇の信頼も厚い。また１９９６年には、日本芸術院会員にも選ばれている。

高井有一氏は「早稲田文学」への尽力の他、稲門出身文学者として常に戦後の文学界をリードし、たびたび本学の文化活動に協力してきている。早稲田大学の文学伝統を継承するとともに、日本の戦後文学に独自の重量感ある文学世界を形成してきた氏の功績は、本学の誇りである。ここに早稲田大学は、高井有一氏の功績をたたえ、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

２００８年4月1日　　早　稲　田　大　学